

ヒルファディングの「貨幣数量説」について

——労働価値論に基づく貨幣理論の発展のために——

小 檜 山 政 克

『金融資本論』第2章におけるルドルフ・ヒルファディングの貨幣理論について、大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』は、「マルクス理論の系譜のうえに立ちながら、〈紙幣本位制〉の解説の点で貨幣数量説の誤謬におちいった」（第3版，p. 171，高木幸次郎氏執筆）と、簡潔、的確な指摘をしている。ところで、ヒルファディングはなぜこのような誤りに陥ったのだろうか。いったいに、貨幣数量説とは、貨幣流通量によって貨幣の購買力つまり物価水準が決まるとする説であるように考えられるが、それは現代社会における貨幣価値の決まり方についての、至極当然の説のように一見みえる。しかし、そもそも、マルクス理論さらには労働価値論に基づく貨幣理論と、このような貨幣数量説とは、どこが、どう違うのだろうか。本稿はこれを明らかにするために、ヒルファディングの誤りを分析するなかでその点を明確に抉り出し、労働価値論に基づく貨幣理論と貨幣数量説の違いと共通点を解明して、両論のいわば橋渡しを試みることにしたい。実は、かつての金本位制時の貨幣商品金の流通必要量（これは金の価値——労働価値論によると金生産のための社会的必要労働量——と流通商品の価値量との関係によってきまる）と紙幣の量の間の横の結びつきが、当時の両者の対比を時系列的に継承したいわば縦の結びつきとして現代の貨幣制度の基礎となっているというのが、本稿の結論なのであるが、そのような結論にいたるまでのプロセスを以下のような順序で述べていくことにする。

まずヒルファディングが全力をあげて擁護しようとした労働価値論について、彼の理解の仕方の特徴をかえりみる。言うまでもなく、価値論というのは貨幣論の原理的基礎になっているものだから、ここでは彼の方法論も含めて、若干詳しく検討を行う。つぎに、金本位制下の貨幣についての彼の説明を追ってみる。そのあとよいよ中心となる、彼の言う純粹紙幣本位制（これは本稿の問題視角からみれば、つまり金との直接の関連が絶たれているという点では、現代の管理通貨制と通ずるところがある）についてのヒルファディングの分析、説明を検討して、そこでの彼の誤りを探る。なお、ここで彼の言う「社会的必要流通価値」が貨幣の「相場」、いわばその価値を決定するという、有名なテーゼが出てくる。ところで、実はヒルファディング自身はこのような純粹紙幣本位制が長期に存続することは、対外経済関係からいっても、紙幣発行の歯止めがかからないという点からいっても、不可能であると主張しているのであるが、現実には、その後、現代社会において、それと類似の通貨体制、つまり実際上金との関係が絶たれたようにみえる通貨体制が確かに存在し続けている。したがって、本稿では現代の通貨体制の性質とその矛盾を解明するために、ヒルファディングがかつて『金融資本論』で不可能と考えていたその純粹紙幣本位制のもつ矛盾、つまりその不可能性の理由についての彼の分析を回顧して、現代の通貨体制の矛盾の解明に資することにしたい。上述のように、現行通貨体制はかつての金と紙幣の横の対比から、そ

こから出発し、かつそれをもとにした歴史的・時系列的な縦の対比によって動いているのであって、そのような数量的な視点からすれば、現代の通貨体制の貨幣数量説的説明は可能である。ただし、そのような通貨体制の奥に横たわっている価値論上の基底そのものを歴史的・理論的に明確にしておかないと、現代社会が絶えず悩まされている通貨体制の攪乱、つまりそこでの矛盾の表面化が正しく理解、説明できず、従ってその解決の方向も発見することができない、ということをも明らかにしたい。

1

ヒルファディングは『金融資本論』の序文の冒頭で、同書の研究の目的を「最近の資本主義発展の経済的諸現象」を「かのペティにはじまってマルクスにその最高の表現をみいだす古典派経済学の理論体系¹⁾」に組み入れようとするものであると宣言し、また、同じ序文の少し先でそもそも貨幣理論というものについて、それが新しい貨幣現象をきちんと説明できなければ、そのもとになっている「すべての経済学体系の基礎となるべき価値論」の正さが経験的に立証されえないと言っている。ここで彼が言う理論体系ないし価値論というのは、もちろん労働価値論のことである。

ヒルファディングはこの著作の至るところで労働価値論の正当性、理論的有効性を強調しており、それは極めて重要であり、多くの場合適切なのではあるけれども、しかし上述の彼の貨幣論における逸脱は、やはり、彼の労働価値論の理解そのもののなかにすでに胚胎している面が見受けられると言わねばなるまい。それでは彼は労働価値論をどのように理解しているのかと言うと、彼の理解の仕方には二つの大きな特徴がすぐに目につく。その一つは、労働の実体や質的側面に関心を向けず、その量的側面にのみ注目しているということであり、もう一つは、価値というものをあくまでその社会的側面においてのみ捉えていると言う点である²⁾。

まず第一の点であるが、結局のところ労働の量的側面にのみ注目しているという場合、ヒルファディングにおいては、交換ということが関心の中心になっているという点にまず注目しなければならない。つまり、商品経済においては、人々はばらばらに独立した個人として活動しているが、人々がそれぞれの産業や職業に分かれて労働するところの社会的分業が発達した社会のなかで、彼らは互いに関連しあわねばならないのであって、その際彼らがこの関連を結ぶ行為こそが、まさに生産物の交換であると強調される。そしてヒルファディングは、この交換の法則を発見することこそが、理論経済学の使命であると宣言するのである。商品経済社会におけるネットワークの結び目が交換であることは、たしかにそのとおりではあるが、そのような交換を必然的なものにするそもそもの基礎は、生産部面における社会的分業の存在である。しかし、ヒルファディングはこの交換の基盤になっている生産活動にはあまり注意しない。そして彼は言う。「商品生産の内部では、交換の根底に交換関係を支配する客観的な社会的契機がある。交換される事物に体化されている社会的に必要な労働時間がそれである。…交換はつねに二物間の量的関係としてあらわれる。」(p. 58)、さらに「商品は社会的に必要な労働時間の体化である」(p. 64)と。

ところで、商品の価値の実体はそこに結晶——体化された労働ではあるが、商品にはもう一つ

の側面つまり使用価値というものがある。しかしながらヒルファディングのこの定式では使用価値が全く脱落してしまっていることは、言うまでもない³⁾。しかも労働時間という量的な問題に進む前に商品生産労働の二面性（使用価値をつくる具体的有用労働と価値をつくる抽象的人間労働の二つの側面）をはっきりさせておかなければならないのに、そこも落ちてしまっている。たしかにマルクスは『経済学批判』のなかで、「労働の量的定在（das quantitative Dasein）は労働時間である」と言い、また「諸商品の使用価値に対象化されている労働時間は、これらの使用価値を交換価値となし、したがってそれを商品とする実体であるとともに諸商品の一定の価値の大きさをはかるところのものである。…交換価値としてはすべての商品は、一定量の凝固した労働時間にほかならない。」（K. マルクス『経済学批判』、国民文庫版、p. 18, 19）と述べて、労働時間が使用価値を交換価値となし、したがってそれを商品とする実体であるとしている。すなわち、物——使用価値が商品になるためには価値を持たねばならず、その価値を付与する実体が労働時間なのだと言っているように見える。つまり価値の実体は労働ではなくて、労働時間であると言っているように見える。しかしマルクスの場合には、使用価値の存在がまず前提となり、そのあとで、「交換価値としては」という限定のもとに、商品は労働時間の結晶だと言っているのである。それでは労働と労働時間とはどう違うのだろうか。

マルクスにおいて、労働と労働時間はどのように区別されているのかと言う問題は、マルクスの使った「定在（Dasein）」というヘーゲルの用語を調べてみることに、その理解の一つの糸口になるだろう。『資本論』においては、このようなヘーゲルの表現はすでに使われず、また「交換価値」というかわりに「価値」となっているのであるが、上に見た『経済学批判』のなかの「価値としてはすべての商品は、一定量の凝固した労働時間にほかならない」という文章はそのまま繰り返して引用されている。「定在（Dasein）」というヘーゲルの用語は、武市健人訳『大論理学』その他では「有」に対するものとして「定有」と訳されているので、本稿でもこれからは「定有」という訳語を使うことにするが、『経済学批判』のコンテキストからすると、労働は「有」であり、労働時間は「定有」になるのではないと思われる。ヘーゲルは「有」は無規定的なものであり、「定有」は規定された「有」であると言っている（武市健人訳『大論理学』、改訳版、上巻の一、p. 77, 117）。そうするとマルクスが「労働の量的定有（das quantitative Dasein）は労働時間である」と言うのは、無規定的な「有」である労働が規定された「定有」である労働時間になったということであり、それは分かりやすく言えば「一定量の凝固した労働時間（bestimmte Masse festgeronnener Arbeitszeit）」になったと言うことなのであろう。

ところがこれに対してヒルファディングが、「商品は社会的に必要な労働時間の体化である」と言う場合、そこで問題とされるのは労働時間の量的比較のみであり、その「社会的に必要な量」というものは、交換によってのみ規定され、確認されるのである。つまり「有」がなく、「定有」のみが出てくるのであって、言い換えれば現象の表面的な連関のみが注目されているのである。

以上ヒルファディングの労働価値論理解の第一の特徴、つまり商品を生産する労働の実体や質的側面をいわば素通りして、その量的な側面のみを研究の対象として取り上げているという点を、明らかにしようとした。

次にヒルファディングの労働価値論理解の第二の特徴、つまり商品を生産する労働なり、商品

なり、貨幣なりを、あくまで社会的な連関において把握しようとしている点について検討してみたい。

ヒルファディングは『金融資本論』第1章を、労働価値論の説明から始めるのであるが、彼は例えばマルクスの『資本論』が一つ一つの商品の分析から始めているのと違って、生産共同体ないし労働共同体である社会の、生産ないし労働の組織の仕方から説明を始める。そして、族長家族や、共産主義的な部族や、社会主義的な社会など、つまり社会全体の生産なり労働なりを意識的に組織して行かう社会と、そのような意識的組織のない社会とに大別して、商品生産社会をこのあとの方の意識的組織のない社会であるとし、そこでの社会的分業を組織するものこそが交換であるというふうに論を進める。そして商品生産労働は、このような生産・労働共同体の総労働の一部としてはじめて、価値をつくる労働という形をとる（erscheinen）のだというふうに、説明する（61ページ）。私はこのようなヒルファディングの労働価値論の説明の仕方は、「ヘーゲル的な」マルクスの説明よりも確かに分かりやすいし、『資本論』のような「芸術的一体」をめざす体系とは違った性質の著述として、それなりの意義をもっていると思う。つまり社会的分業を自然発生的に組織・調整する規制力という点から価値法則ないし労働価値論を説明することは、当をえていると私は思う。ただし、この点は同時に、ヒルファディングの場合、マッハ主義的な表面現象の連関になによりも注目するという分析の仕方と結びついているのであって、あとあとに貨幣理論の逸脱をもたらすことになるのである。

2

さて、このような、ヒルファディングの労働価値論の第二の特徴である社会的側面の強調という点は、彼の貨幣についての説明の仕方によくあらわれている。かれの貨幣について一番最初の定義は、「商品たちの共同行為によって他のあらゆる商品の価値をいいあらわす資格をみとめられた事物（Sache）——それが貨幣である」（65-66ページ）というのであるが、これは別に間違っていない。たしかに、社会的連関から貨幣の本質を説明しているけれども、ここでは事物がきちんとその場所に置かれている。マルクスが『資本論』で商品はまず第一に物（Ding）であると言う場合の物（Ding）とヒルファディングの事物（Sache）との少しの違いはさておいて、ここでは、社会的連関と事物（Sache）とが結びついている。だが、先へ進むとこの二つの結びつきが曖昧になってくるのである。

ヒルファディングは流通手段としての貨幣の貨幣証券による置きかえの可能性についてあらまし次のように言う。貨幣は、一方でそれ自身例えば金という労働生産物として価値をもっているからこそ貨幣となっていることができる、つまり他の商品の価値をあらわすことができるのであるが、商品流通の媒介手段というその社会的側面は、金という物ではなくても、意識的社会的調整つまり国家の調整によって表現することもできる、すなわち国家は一定の記号のある紙片を、貨幣の代理者つまり貨幣証券にきめることができると。（77ページ）。しかしマルクスの場合には金の価値を象徴的に表わす紙片に国家が強制通用力を与えるものであることが明らかにされている点に注意すべきである。

ヒルファディング自身の文章を見てみよう。彼は『金融資本論』第2章「流過程における貨幣」で次のように言っている。「貨幣は価値結晶としては必然的（原文では *notwendig* で〈必要不可欠〉とでも訳したほうが分かりやすいだろう——引用者）だが、等価形態としては余計なもの（*ueberfluessig*）である。…だが貨幣表現は一時的にとどまり、いわばそれじしん重要ではない。だからもっぱら貨幣の社会的側面、すなわちそれが価値としては商品と等しいという属性のみが問題となる。社会的側面は、たとえば金貨におけるように、貨幣材料のうちに物的に表現されている。が、この社会的側面は直接に意識的社会的調整によって、あるいは別の言葉でいえば、国家の調整によって、表現されることもできる。すなわち国家は一定の証券——たとえば、そのような記号のある紙片——を貨幣の代理者つまり貨幣証券にきめることができる」（77ページ）。

この文章は、いわばヒルファディングの貨幣論、とくに金本位制のない経済社会における貨幣についての彼の論理の出発点となっている。この文章の冒頭の数行はちよつと分かりにくいかもしれないが、これはマルクスが『資本論』第1巻第3章で明らかにしていることを、言い換えたに過ぎない。そこでマルクスは、商品の価値を金貨幣であらわすこと（ヒルファディングがここで言う「等価形態」というのは分かりやすく言えばそういうことである）は観念的なものだから、そこではただ表象化された（*nur vorgestellt* 「思い浮かべられただけの」という意味——引用者）だけの金でよい、現物の金はいらない（*ueberfluessig*）（国民文庫版『資本論』〔1〕、1961年、p. 168-169）と言ひ、さらに流通手段（商品交換の媒介者という貨幣の機能）としての貨幣は、すぐにまた他の商品によって置き換えられる、いわば瞬間的な存在だから、たんに象徴的な（*symbolisch*）存在で充分である、ここでは貨幣の「機能的定在（*Dasein*）がいわばその物質的定在を吸収する」（国民文庫版『資本論』、p. 223）のだ、と言っている。すなわち、ここまでのところでは、ヒルファディングはマルクスの見解を言い換えただけで、その論理に別段の問題はないようにみえる。しかしこの引用文の後段で彼が「この社会的側面は直接に意識的社会的調整によって…表現されることもできる」と述べている個所は問題を含んでいる。つまり「物」を離れて「直接に」社会的調整で表現できるのではなく、あくまでそこに「物」があることが必要で、社会的調整がその「物」の社会的側面を間接的に表現できるだけなのである。

さてそこで、さらにヒルファディングは言う。この貨幣証券は、貨幣のいろいろな機能のうち、流通手段としての機能しかはたすことは出来ない。そして、この紙幣の量はつねに流通に必要な貨幣量の最低限以下でなければならない。だが、この最低限は紙でおきかえることができる。そして、それだけにはつねに流通に必要なのだから、そこへ金がいってゆく必要はない。ゆえに国家はこれだけの紙幣は強制通用力を付して発行することができる。この限界内でのみ、貨幣証券は貨幣の完全な代理者として機能し、紙が金証券なのである。（上掲『金融資本論』〔1〕77-79ページ）。

しかしながら、——とヒルファディングは続ける——流通の量は絶えず動揺する。そしてこの流通最低限を超えて紙幣が発行されれば、紙の名目価値とそれの現実的通用力がずれて、紙幣価値の下落がおこる。だから、紙幣とならんで金貨がたえず流通に入ったり出たりすることができなければならない、と。（上掲書、79ページ）。

3

そのあと、いよいよ問題のヒルファディングの貨幣数量説が展開されるのである。それは、ヒルファディングが上述の命題、つまり流通最低限内では紙幣が金の代理者として機能できるが、その限界を超えると紙幣価値の下落がおこるという命題を、説明するために、純紙幣本位を仮定して、そこでの事態の分析を試みているなかで、展開されるのである。ここで彼が仮定した純紙幣本位というのは、彼が同性質のものとみている自由鑄造禁止制（109ページ）ということでもあって、要するに貨幣商品金との結びつきが絶たれた貨幣制度のことなのである。その意味では、現代の管理通貨制とも共通の性格をもっているものであると考えられる。

そして、ヒルファディングによると、このような純紙幣本位制においては、紙幣の価値は流通商品価格の総和できまり、金の価値とはまったく独立して商品の価値をじかに反映するというのである（80ページ）。かれはまたそれを次のように文学的に表現する。「紙幣の価値は、自分自身のとるにたらない僅少な価値によってではなく、じぶんの価値を紙の札に反射させるその商品総量の価値によってきまるのだ。しぶん自身ではとくに冷却してしまった月が燃える太陽から光をうけとって輝くことができるように、紙幣は労働の社会的性格が商品に価値をあたえるので、はじめて価値をもつ。紙を貨幣にするものは、反射された労働価値であって、それは月を輝かすものが反射された太陽の光なと同様である。」（82ページ）。この文章はいかにもヒルファディング的であって、一見するとあたかも貨幣数量説の労働価値説的説明のようにみえるけれども、実はそうではない。「紙幣は労働の社会的性格が商品に価値をあたえるので、はじめて価値をもつ」のではなく、「紙幣は金の象徴としてはじめて価値をもつ」のである。紙幣は、価値の実体をもつた物、たとえば金をその基底にもち、その代理者としてはじめて通用するのであって、そのような価値の実体をもつた物がなければ、そもそも、商品の価値は表現しようがなく、測りようがないのである。それが、マルクスが明らかにした労働価値論にもとづく貨幣理論なのである。

ところで、わがヒルファディング氏は自己の論理の矛盾を感じたのであろうか、その少し先で「貨幣理論家をなやます問題は、自由鑄造の禁止されている本位制では、なにが価値の尺度か、ということである」（93ページ）と、まことにもっともな問いを立てる。そして、この問いに対して、次のように答える。

「およそ理論家をバカにするものは、貨幣が価値尺度たる属性をもっているようにみえる点である。もとより、あらゆる商品は依然として貨幣で表現され〈尺度〉される。貨幣は相変わらず価値尺度としてあらわれる。だが、この〈価値尺度〉の価値の大きさは、もはや価値尺度たる商品の価値、いいかえれば金または銀または紙の価値によって決定されるのではない。むしろ現実には、これの〈価値〉が流通すべき商品の総価値によって決定される（流通速度の変わらないばあい）。現実の価値尺度は貨幣ではなく、かえって貨幣の〈相場〉が、社会的に必要な流通価値とわたしの呼ぼうとするものによって決定される。この〈社会的に必要な流通価値〉 *der gesellschaftlich notwendige Zirkulationswert* というのは、いままで簡単化のために無視してきた貨幣の支払い機能をも考慮に入れば、

$$\frac{\text{商品価値の総和}}{\text{貨幣の流通速度}} + [\text{期限のきた支払い額}] - [\text{たがいに相殺される支払い}] \\ - [\text{同一貨幣片が流通手段あるいは支払い手段として交互に機能する流通額}]$$

という定式によってあたえられる。これが標準ではあるが、もとよりその大きさはあらかじめ算定はできない。この例題をときうる唯一の算術の先生は社会である。その大きさは変動し、したがって貨幣の相場も変動する。…この変動は価値尺度としてふたたび完全価値の商品（金・銀）が貨幣として機能しはじめるや否や、のぞかれる。それがためには、すでにみたように、けっして紙幣または不完全価値の貨幣が取引界から姿をけす必要はなく、ただそれが流通最低限におさえられ、この最低限をこえる動揺が完全価値ある貨幣の登場によって除かれさえすればよい。」（94-95ページ）

この長い引用文のなかに出てきているのが、かの有名なヒルファディングの「社会的必要流通価値」である。ここで彼は、それまで金本位制の説明において大体においてとっていた立場から正反対の立場に逆転して、貨幣商品金そのものの価値を完全にすっぼかしてしまう。この文章の彼の主張を総括的にみれば、金と切り離された紙幣は、流通商品量と流通貨幣量によって、その価値が決まるということであって、まずはおおまかにいって、貨幣数量説と変わりはない。言い換えれば、紙幣の基礎になっている貨幣商品金の価値を全く無視して、流通商品量と流通貨幣量の量的関係からのみ貨幣の価値を見るという点において、いわば貨幣数量説の一変種と言えるのではないだろうか。現にこのすこし先で、ヒルファディング自身が、自由鑄造の禁止された本位制には数量説 *die Quantitaetstheorie* があてはまる (*gelten*) と言っているのである（106ページ）。ただし、貨幣価値の変動は、流通最低限を超える部分に金を注入すればおさまる、と彼はその持論をたびたび繰り返しているのであるが。

ヒルファディングの貨幣数量説についての説明をもうすこし見ていこう。『金融資本論』のその先でかれは次のように書いている。紙幣が過剰に発行されるということは、それが代理するはずの金属にくらべて紙幣の価値が下落することになってあらわれる。ここで問題なのは、自由鑄造禁止制のもとでは紙幣の全額が流通にとどまり、そこから出ることが出来ないということである。それは、どれだけ発行されるにせよ、紙幣の全額の相場は流通にある商品によってあたえられるからである（ここで貨幣の役割をはたす商品、金じしんの価値の問題が抜けおちている）。しかし、自由鑄造制のばあいには、そうではなくて、金はそのときどきの需要に応じて流通に出入りし、過剰部分は価値の担い手として銀行にたくわえられる。だから、数量説の言うような、流通にある完全価値の金属貨幣の量によってその価値が変動するということなどは、まったくない（108-109ページ）。

そしてヒルファディングは次のように述べる。「純紙幣本位の場合には、だから、紙によって代表される価格の総和は、流通速度を同一とすれば、商品価格の総和に正比例し、発行紙幣単位の量に逆比例して変動する。…その場合には、流通手段は貨幣証券すなわち金証券ではなくて価値証券である。だが、そのような流通手段がこの価値をうけとるのは、けっして紙が金の代表者にすぎない混合本位（これはヒルファディングの言う、金との関係を絶たれた〈純紙幣本位〉) に対立する本位制のことであろう——引用者) のばあいに紙が金からこの価値をうけとるように、ある単一商品の価値をとおして受け取るのではない。そうではなくて、紙幣の総額は、貨幣の流通速度がお

なじなら、流通にある商品量の総和とおなじ価値をもつ（そのような価値を何によって、つまり何を媒介にして、どのように表現できるのか。流通にある商品量の総和とおなじ価値をもつた金の額に等しい、と書くべきだろう——引用者）。紙幣総額の価値は、だから、社会的総流過程の反映にすぎない。この総流通にあっては、一定の瞬間に交換されるべき一切の商品が単一の価値総和として、一体となって作用し、これにたいしては、紙幣量が社会的交換過程をとおして等しい一体として対置されるのである。」（109-110ページ）。この文章の冒頭のところの意味は、文章の末尾と対照してみると、要するに、流通商品総量と流通紙幣総量の比率の問題のようであって、その場合前者が主導権をもっていて、後者が一定で前者が変動すれば、紙幣総額の価値は前者に正比例するし、前者が一定で、後者が変動すれば、それに逆比例する、つまり、紙幣発行量がふえれば、たとえば、いままで1億ドル発行されていた紙幣が、2億ドル発行されれば、1億ドルが代表する商品の額は半減するといった意味なのではないかと思われる。

なお、念のために、K. マルクスが、『資本論』第1巻第3章第2節〔c〕で、強制通用力をもつ国家紙幣について述べているところを、確認しておこう。そこでマルクスは、紙幣の発行は、紙幣によって象徴的に表される金が現実に流通しなければならないであろう量に制限されるべきであること、一国における流通手段の量は経験的に確認される一定の最小限以下にはけっして下がらないから、その最小量は紙製の象徴で代位できるのであって、その限度を越えても、代表されうだけの量を表すだけであること、紙幣の商品価値にたいする関係は、ただ紙幣によって象徴的に表示されているのと同じ量で商品価値が観念的に表現されている、ということにあるだけである、紙幣の量が二倍になれば、以前は1ポンドという価格で表現されていたのと同じ価値が、いまでは2ポンドという価格で表現されることになる、結果は価格の尺度としての金の機能に変更された場合と同じである、と書いている（大月書店国民文庫版『資本論』〔1〕、1961年、p. 219-221）。問題は、マルクスの場合完全価値のある金属貨幣金との結びつきが前提となって論が進められているが、現代経済においては、その結びつきが一見明らかではないのであって、そのためにこそ、われわれはヒルファディングの言う純紙幣本位制についての考察から、なんらかの教訓を導き出そうとしていることは、言うまでもない。

なおヒルファディングの貨幣理論のエッセンス、つまりその誤りと、同時にそこにある現代通貨制度分析への手掛かりを確かめるために、『金融資本論』第2章の終わりに近いところにある注のなかで述べられている、マルクスの貨幣理論についての彼の主張を詳しく見てみよう。そこで彼は次のように言う。

「流通が金を必要とするだけの紙幣しか流通には存在しえないとマルクスが強調する場合、近代の本位現象の理解に重要なことは、この金の数量そのものが——その価値は一定だから——社会的流通価値によって、そのときどきに決定されるということを想いおこすことである。すなわち社会的流通価値が下がれば、金は流通から流れ出し、逆のばあいには逆になる。だが、紙幣本位および自由鑄造の禁止された本位（いうまでもなく現代経済の通貨体制もそうである——引用者）のばあい、一般に流通からの流出入はおこりえない（したがってインフレーションの危険性がつねにある——引用者）。それは流通していない紙片は小価値だろうからだ。ゆえに、ここで決定者としての流通価値にさかのぼらざるをえないのであって、マルクスが『経済学批判』でしたように、貨幣証券をただの金証券として考察するだけで満足することはできない。」（113ページ）

この文章の後段で述べられていることは、金と直接の結びつきを絶たれた紙幣の価値（購買力）を考察するには、紙幣は金の代理者にすぎないと言っているだけではだめだということであって、それは、そのかぎりではもっともであって、数量説との橋渡しの問題が出てくることになるわけである。そしていわゆる管理通貨制のもとでわれわれはヒルファディングのいう「意識的社会的調整」とは違った意味での通貨調整政策をとることが必要になってくる。しかもそれはマルクスの貨幣理論を正確に発展させたものでなければならないのである。

さてヒルファディングは、同じ注のなかで、これにすぐ続けて次のように主張する。

「マルクスが紙本位（または自由鑄造の禁止された本位）の法則をつぎのように定式化するの、このうえなく正しいと、わたしにはおもわれる。——『無価値な札は、それが流通過程の内部で金を代理するかぎりでのみ、価値証券であり、そして、これらの札は、金そのものが鑄貨として流通過程に入るはずの範囲でのみ、金を代理する。この流通過程に入るはずの金の量は、諸商品の交換価値およびそれら商品の転態速度を一定とすれば、金それじしんの価値によって決定される。』と。[マルクス『経済学批判』、国民文庫版、143ページ]。ただし、マルクスがやったように、まず鑄貨量の価値を決定しておいて、それからこの価値によって紙幣の価値を決定するというような回り道だけは不用とおもわれる。このような決定の純社会的な性格は、紙幣の価値をじかに社会的流通価値からみちびきだすほうが、はるかにヨリ明白にあらわれる。歴史的に紙幣本位が金属本位から発生したということは、これを理論的にもそうみるべきだとする根拠にはならない。紙幣の価値は、金属貨幣をひきあいにだすことなしに、みちびきだすことができねばならない。」（113-114ページ）。

この文章のなかに、ヒルファディングの誤りがこの上なく明瞭にあらわれている。「紙幣の価値をじかに社会的流通価値からみちびきだす」と彼は言うけれども、そもそも「社会的流通価値」なるものを、なんであらわし、なんではかるというのか。商品総量に投下された労働量としての価値は、一般的等価物の役割をはたすところの、それじしん価値をもった商品、つまり貨幣商品でしかあらわすことはできない。だから、「マルクスがやったように、まず鑄貨量の価値を決定しておいて、それからこの価値によって紙幣の価値を決定するというような回り道」がどうしても、必要なのである。もちろん、この「回り道」は、金本位制の場合のように、直接目に見えて明らかな場合もあるが、現代通貨制の場合のように、非常に間接的であって、言ってみれば詳細な科学的詮索をしなければわからない場合もある。

4

ヒルファディングは、このように、金との結びつきをもたない「純紙幣本位制」なるものを仮定して、その場合の紙幣の価値は、金の価値とは関係なしに「社会的流通価値」から導きだせるという主張をしたのであるが、実は彼は、このような「純紙幣本位制」なるものは、現実には不可能だと見なしていたのである。かれは、その理由として、第一に、対外経済関係の問題をあげている。国際貸借の決済には金属すなわち自分自身価値をもった貨幣が必要になる。そうすると、たちまち貿易取引の攪乱をさけるために、国内で流通する貨幣の価値をも国際支払い手段とおな

じ状態にたまたざるをえない。つまりは、金との結びつきが必要になるということである。彼は、第二に、このような本位制を實踐上暗礁にのりあげさせるものは、そのような国家紙幣の増加をふせぐなんらの保障もありえないことだ、と言っている。

われわれは、現代社会において、ヒルファディングの言う「純紙幣本位制」なるものにも似た、金との直接的結びつきをもたないように見える通貨体制のなかで、経済活動をおこなっている。この通貨体制は、たしかに、言いようもないほどの混乱をもたらすような矛盾をもってはいるものの、とにもかくにも、現代経済はそれでもっているのである。どうしてもっているのかという問題は、それじたいとして解明しなければならない問題であるけれども、ここでは、ヒルファディングが「純紙幣本位制」の存続不可能性について指摘した二つの理由についてそれを考えてみよう。

第一の国際経済上の通貨体制の矛盾については、主として米国のドル（1971年以来金との結びつきが絶たれた紙幣）が、金の代わりに、いわゆる基軸通貨といわれるような役割をはたしており、それが、目先の困難をとりあえずは回避して、絶えず混乱をまきおこしながらも、矛盾の爆発を抑えてきたと言ったことができよう。第二の紙幣増発の危険をふせぐ保障というのは、究極的には存在しないのであって、その意味では、現代社会はつねにインフレーションの脅威にさらされていると言わねばならない。しかしながら、この問題も、一部の例外を除けば、まずは各国の政府の政策、あるいは国際的な協調によって、矛盾の表面化が抑えられていると言ってよいであろう。

さて、以上見てきたとおり、ヒルファディングが貨幣理論について試みた探究と誤りからいまわれわれが引き出さなければならない教訓というのは、次のようにまとめることができよう。それは、その時期その社会の通貨——紙幣が、金との目に見えるような直接的な結びつきがないという表面的な現象に目をうばわれて、ただちにすぐには目には見えないが、その奥底に横たわっている、間接的ではあるが本質的な金との結びつきを見落としてはならない、ということである。もしそうしなくなると、理論的には、紙幣がそれを象徴しているところの、その本体である貨幣商品金の価値を無視するという貨幣理論上の重大な根本的誤りにおちいり、いわば浅薄なかたちでの貨幣数量説の欠陥を繰り返してしまうことになる。また、実践的には、現代の通貨体制の奥底にある根本的な矛盾を見透すことができず、現代経済をたびたび襲う混乱の根本をきちんと認識して、正確に対処することができないであろう。根本的には、この基底として存在する金との関係を基準としながら、通貨・金融・財政政策を進めることが重要である。その意味では、労働価値論にもとづいて展開されたK.マルクスの価値形態論、すなわちその貨幣理論、つまり商品の価値はそれじしん価値をもつた他の商品の使用価値でしか表すことも測ることもできないという命題は、今日の通貨問題の理解にも不可欠なのである（この点は実はヒルファディングじしんが第2章の結びに近いところで強調しているのである）。しかしながら同時にまた、そのような認識を踏まえた上での、流通商品量と流通貨幣量との比較からする貨幣論、そうした意味での貨幣数量説は、それなりに有効であると言わねばならない。

しかしながら、そこで残る問題は、このような労働価値論にもとづく貨幣理論と今日の通貨体制の性格についての説明とをどのように結び付けるのか、ということである。言い換えれば、このような、今日の貨幣の直接的には目にみえない金との間接的な結びつきを、どのように解明し

ていくのか、言い換えれば、その結びつきをどのように説明し、その存在を実証していくのか、という問題である。ここでは、その解明と実証の作業の方向を示唆して、結びとしたい。なお、それができれば、労働価値論にもとづく貨幣理論と貨幣数量説（流通商品量と流通貨幣量との関係から貨幣購買力を導き出そうとするものとしての貨幣学説）とを結合することが可能になるだろう。そしてそのような結びつきについての解明は、現代社会で貨幣の量的調整政策を進める上での重要な基準となることは疑いない。

それは、すくなくとも理論的には、こういうことである。まずその国の金本位制期の流通商品量と流通必要金量の比率を割り出し、次にその時期の流通商品量と現在の流通商品量（これは当時から今までの累積物価上昇率で割った修正金額）との比率を算定する。これらの数字から、現在どれだけの商品量（もちろん価格表示のもの、すなわち実質商品価格総量）が、計算上どれだけの当時の金と等しいとされるかが、判明するだろう。つまり、当時の横の対比をもとに、そこから出発して、時系列的な縦の比較を行えばよいのである。例えば、ある国で、金本位制が1930年まで存続してその年に廃止されたとし、その年の流通商品量がドル表示で1万ドル、流通必要金量が1キログラムであったとすれば、その年の流通商品量と流通必要金量の比率は、10,000:1,000つまり10:1であったことになる。これに対してその国の1998年の流通商品量が1,000万ドル、つまり1,000倍になっているとすれば、現在の流通必要金量は、金本位制最後の時点の比率1万ドル:1kgを基礎にすれば、 $1\text{ kg} \times 1,000 = 1,000\text{ kg}$ ということになる。すなわちその国の今日の紙幣は、1,000kgの当時の金を代表しているということになる。もちろん、これは考え方のすじみちを示しただけであって、実際には、現存する非常に不完全な統計資料からこのような計算を行うには、大きな統計学的、計量経済学的な才能と努力が必要とされるのであって、筆者としては他日を期するしかない。

- 1) ヒルファディング著、林要訳『金融資本論』（大月書店国民文庫、1970年）p. 49. 以下本稿で引用書名なしにページ数だけ示している場合にはこの訳書のページのことである。なお本稿が参照したドイツ語版テキストはRudolf Hilferding “Das Finanzkapital, Eine Studie ueber die juengste Entwicklung des Kapitalismus” (Europaeische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main, 1968)である。
- 2) なおこの点については、ヒルファディングのなかに、現象の背後の実体を否定して、あくまで現象間の相互連関のみを、そしてそこでの関数関係の発見のみを科学の課題としたエルンスト・マッハの方法論の影響が強く存在することを論証した有井行夫氏の論文「ヒルファディングとマッハ、——『金融資本論』の方法——」（『駒沢大学経済学論集』、第9巻第1号）が非常に参考になる。

ところで、レーニンも『唯物論と経験批判論』のはじめのところでマッハについて次のように書いている。「マッハは1872年につぎのように書いた。〈科学の任務たりうるのはつぎのことだけである。

1. 表象間の連関の法則をさがしだすこと（心理学）。
 2. 感覚間の連関の法則を発見すること（物理学）。
 3. 感覚と表象との連関をあきらかにすること（精神物理学）。
- これはまったくはっきりしている。物理学の対象は感覚間の連関であって、われわれの感覚がその像であるところの物または物体のあいだの連関ではない。」（大月書店版邦訳『レーニン全集』第14巻 p. 36-37.）

われわれがヒルファディングの貨幣論の誤りを克服するためには、マッハ主義を弁証法的唯物論の生成の立場から批判的に克服していくことが必要であろう。

- 3) またヒルファディングが『金融資本論』第2章冒頭のパラグラフの終わりに近いところ、75ページで「商品の価値は他商品の価値によっておきかえられる」と述べているのも、理解に苦しむ。使用価値の異なった商品の交換こそが意味をもっているのだから。